

第160回 令和8年1月22日（木）

「油断について。」

「油断」は「油を断つ」と書きます。文字通り「油」が絶える、つまり重要なものやそこへの注意力が失われる状態を意味します。不注意な状態になっていること、警戒を怠っていることを指し、必要な注意や意識を欠いた状態によって危険や失敗につながる可能性を秘めている状態を指します。

「寝耳に水」といいますが、まったく予想もつかなかった事態がおきることを指します。しかし想定外の事態というのは日ごろからの油断が招いている面も多く、実は心の片隅で気になっていたことが現実化したというケースが多く見受けられます。「これは起きるはずがない」と思い込むことを安全性バイアスと言いますが、特に会社などでは「心に残る小さなこと」を放っておかないことが大切です。確率的には低いものの、起きた時には被害が甚大になってしまうことがあります。

油断は、「大丈夫」と思い込んで気を緩めてしまう勘違いや過信から生まれます。目の前の物事が安全だと思いこんで行動を疎かにすると失敗が生じます。何回かお話ししていますが波がたっていない時期が一番怖いということ。そこに油断が生じます。

「油断」の語源や背景について、いくつかの説があります。

昔の日本では、灯火として灯油や菜種油がよく使われていました。明かりを保つために油を絶やさないように注意することが重要でした。油が絶えると明かりが消えるため、暗闇に包まれて危険な状況になることもあります。そのため、「油を絶つこと＝注意を欠くこと」を「油断する」という習慣に結びつたとされています。

武士の世界では、油断は命を落としかねない重大な過失とされました。戦国時代などでは、「注意を怠ること」が敵につけ込まれる原因となり、命取りになります。

「油断大敵」という言葉が特に武士たちにとって重要な警戒心を促す教訓として根付いていきました。

「油断」は現在でも日常の中で頻繁に使われる言葉ですが、本来の意味を踏まえることでその使い方に効果が出ます。「これで完璧だ」と思い、注意を欠いてしまう際に「油断しないように」と使われることがあります。初問の簡単な計算問題こそしっかり見直す必要がありますよね。全員が得点するところでケアレスミスをすると致命的になります。

「覆水盆に返らず」という言葉は油断で起きたミスは元に戻せないことを示唆することわざです。注意を怠ることへの戒めとして使われます。仏教では、「心の油断」は執着の原因となるため、自己の内面を律することが勧められています。

油断で怖いのは火事と交通事故です。「まさか」と思わぬよう日ごろから注意してください。